



Title	モスクワにおける「日本児童書籍展覧会」 : VOKSと日ソ文化交流 1925~1928年
Author(s)	木下, 裕子; KINOSHITA, Hiroko
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 35, 3-20
Issue Date	2022-11-17
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/88251">https://hdl.handle.net/2115/88251</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_kinoshita_no.35.2022.pdf



## モスクワにおける 「日本児童書籍展覧会」 —VOKSと日ソ文化交流 1925～1928年—

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

木下 裕子

“Exhibition of Japanese children's books”  
in Moscow — VOKS and Japan - Soviet  
Cultural Exchange, 1925-1928 —

KINOSHITA Hiroko

abstract

After the Soviet—Japanese Basic Convention was signed in January 1925, various cultural exchanges were conducted during imbalanced relations by All-Unions Society for Cultural Relations with foreign countries (VOKS — “Vsesoiuznoe Obshchestvo Kul'turnoi Sviasi”), an entity created by the government of the Soviet Union, and private organizations of Japan. “Exhibition of Japanese children's books” was held in Moscow in October 1928. This study aims to elucidate how the exhibition of Japanese children's books was realized by collecting as many records as possible, reconstructing the whole picture of the exhibition of Japanese children's books, and examining the background of the exhibition, the contents of the exhibits, and the networks of the people involved. Finally, we discuss the background where the exhibition of Japanese children's books took place and the significance of the exhibition.

# 1 はじめに

1925年1月20日、日ソ基本条約が成立した。しかし、日本側は関東大震災によって経済的に疲弊していたこと、治安維持法公布<sup>1</sup>直後でソ連の赤化宣伝に神経質になっていたことで、国交は回復したが両国の関係改善は実際にはなかなか進まなかった。日本とソヴィエト連邦という体制の異なる二国は、それぞれの思惑を持ちながら具体的な関係改善の方法を探り、文化交流という手段を利用せざるを得なかった。ソ連側は国家機関「全ソ対外文化連絡協会」（以下ヴォクスVOKSとする）、日本側はソ連研究者や芸術家、民間団体と窓口が異なる不均衡な関係の中で文化交流が行われた。しかし、表面上は不均衡であっても両国の芸術家たちの交流を望む気運の高まりの下で人的交流が盛んに行われた。1928年には歌舞伎の初海外公演と「日本児童書籍展覧会」<sup>2</sup>（以下「日本児童書展」とする）のソ連開催が実現し、交流のピークを迎えた。

8-9月の歌舞伎のモスクワ、レニングラード公演は総勢47人の役者と裏方、日本と同様な舞台装置の運搬という大掛かりなもので、これに関しては詳細に記録され研究がされている。しかし、それに続く10月から翌年8月にかけてモスクワ他3都市で開催された日本児童書展に関しては、当時の新聞記事、あるいは書籍等に部分的に記述されているだけである。この児童書展は、ソ連の一般市民、特に児童に向け広く日本の児童文化に対する関心を喚起させようとしたことが<sup>3</sup>、それまでの政治家、経済人、芸術家、研究者による交流とは異なる点である。本稿ではこの児童書展に注目する。周辺研究として、M.デヴィッドフォクス（M. David-Fox）は1920-30年代ヴォクスを通じてすすめられた積極的な西欧との文化交流について論じ<sup>3</sup>、内田健介は日ソ国交回復前後の文化交流とその政治背景について分析をしている<sup>4</sup>。また児童書展の先行研究として、沼辺信一は1929年にソ連で刊行された日本の民話と児童書展との関係について<sup>5</sup>、O.ヴィノグラードヴァ（O. Виноградова）とK.ザハロフ（K. Захаров）は1928年ソ連で開催されたドイツと日本の児童書展を契機にソ連の児童書の作り手たちがいかに外国の児童書を受容したか、またその仲介者の存在について考察をしている<sup>6</sup>。しかし児童書の枠組みの中で述べられているにすぎず、児童書展の全容及びその背景についてまで言及しているものは管見の限りでは見出すことは出来ない。ゆえに児童書展の全容を詳らかにすることは、国交樹立後の二国間の文化交流をより広く詳細にその諸相を考察するうえで意義があると考えられる。本稿では、まず背景となる日ソ基本条約成立後から児童書展開催までの二国間の文化交流事業とそれに関わった団体を明らかにする（第2節）。次いで、児童書展に関する残された記録を可能な限り集め、その全容を再構築し、開催の経緯、展示物の内容、人的ネットワークを精査する。さらに児童書展がソ連でいかに受け入れられたかを分析する（第3節）。それによって児童書展はいかなる背景の下でその開催が実

▶1 1925年4月22日公布、5月12日施行。

▶2 日本語の名称は様々である。「日本児童書籍展覧会」（『日露協会報告』第39号、日露協会、1928年、p.1）、「日本の児童図書及び児童製作展覧会」（尾瀬敬止『日露文化叢談』、大阪屋號書店、1941年、p.159）、「日本児童図書、及成績品展覧会」（外交資料館資料、Ref. B04012283900）等々。

▶3 Дэвид-Фокс М. (2015)

▶4 内田健介 (2017)

▶5 沼辺信一 (2005)

▶6 Виноградова О., Захаров К. (2019).

現したのかを検討し（第4節）、児童展開催の意義について考察する（第5節）。

## 2 日ソ基本条約成立後の日ソの文化交流

国交回復はしたが、実際には両国の関係は膠着状態が続き、ソ連側は表立った政治的活動は出来ず、文化交流という手段によってその可能性を拡げようとした。在日ソ連大使館内にあるヴォクスの日本支部が窓口となって、主にソ連側からの交流が盛んに行われたのである<sup>7</sup>。以下では、国交回復の1925年から1928年児童書展開催までの二国間の文化交流事業と、それに関わった団体について述べる。

▶7 チェーリンは、ヴォクスに対して日本での文化交流の活発化、科学アカデミーを通じた学術交流を推進するよう指示をしている。富田武（2010）p.53を参照。

### 2-1 日本における文化交流事業

■表1 日本における日ソ文化交流

年	展覧会等	主催	国内情勢
1925年	1/20 日ソ基本条約締結		
	3/22-29 「新ロシア美術展覧会」（東京）	日露芸術協会	4/22 治安維持法公布 5/ 5 普通選挙法公布
1926年	1月 「ロシア展覧会」（大阪）	日露協会	
	3/17-5/25 作家ピリニャーク来日	日露芸術協会受入	
	8/21-23 「ソヴェト連邦国情紹介展覧会」（在日ソ連大使館）	VOKS	
	10/29 「産業文化博覧会」において「ロシアデー」	中外商業新報社	
1927年	4月 美術批評家ブーニンとアルキンの来日		3月 昭和金融恐慌
	5-7月 「新露西亜美術展覧会」（東京・大阪・名古屋） 駐日ソ連大使館・日露協会・日露芸術協会後援	VOKS、朝日新聞社	
	7/16- 「ロシア児童作品展覧会」 大阪・神戸・京都・名古屋・横浜・東京	VOKS	
	9-10月 日本学者コンラドの来日		
	10/29 「日露児童絵画展覧会」（在日ソ連大使館） 日本300点、ロシア60点	VOKS	
1928年			3/15 共産党大検挙 6/29 治安維持法改定
1929年	4月 「ソヴェト映画の展覧会」（東京新聞社）	全関東映画連盟	4/16 共産党大検挙

表は本稿で引用した新聞、雑誌等のデータを基に筆者作成。

1925年1月日ソ基本条約調印後、同年3月に「日露芸術協会」が組織され、

8月に「ヴォクス」が設立されると、さまざまな文化交流が行われる。翌年3月作家B.ピリニャーク (B. Пильняк 1894-1938) が来日<sup>8</sup>した際には日露芸術協会が受け入れ団体となった。他にも演奏家や歌劇団<sup>9</sup>、日本学者のN.コンラド (H. Конрад 1891-1970)、メイエルホリド劇場から演出家G.ガウズネル (Г. Гаузнер 1907-1934)<sup>10</sup>と文化人の来日が続々と続く。1927年4月には美術批評家N.プーニン (H. Пунин 1888-1953) とD.アルキン (Д. Аркин 1899-1957) が来日する。彼らは、5月から7月にかけて開催される「新露西亜美術展覧会」<sup>11</sup>のための作品を、シベリア経由で陸路運ってきたのである<sup>12</sup>。この展覧会は、日本で開催された日ソの文化交流の中で最も大規模なもので、ヴォクスと朝日新聞社の主催によって東京・大阪・名古屋の三都市<sup>13</sup>で開催された。ソ連作家の400点あまりの作品が展示されるという例を見ぬ規模のもので、「催しが美術界を含め各方面に与えた影響はにわかには図りがたい」と評されている<sup>14</sup>。

また同年7月には「新ロシア児童作品展覧会」が開催された。7月2日付東京朝日新聞によれば「モスコウ、レニングラード、ウクライナ、ボルガ等の労農ロシア各地の幼稚園や小学校の生徒の作品約1千点が29日霞ヶ関のロシア大使館に到着した。この作品展覧会は来る16日から4日間大阪の朝日會館で開かれるのを振り出しに神戸、京都、名古屋、横浜の各地で巡回的に展覧会が催され、最後に東京で開催せられるはずである」とある。さらに、それらの作品に日本の児童の作品を加えて、10月29日に在日ソ連大使館で「日露児童絵画展覧会」が開催されている<sup>15</sup>。

これらの交流を受け入れたのは主に以下の三団体である<sup>16</sup>。

## 2-1-1 日露協会

日露協会は、他の二団体と比べ歴史が長く、1902年に榎本武揚 (1836-1908) を初代会頭に設立された。日露戦争後、日本はロシアとの協商関係樹立を考え、日露両国間で働く人材を必要としていたことが発足の動機である。1920年には後藤新平 (1857-1929 政治家、就任時は東京市長) が会頭に就任している。会員は皇族、政治家、財界人と後藤人脈が中心であった。「露国ノ学術及事情ノ研究ヲ奨励シ且ツ日露両国民ノ交誼ヲ増進スル」<sup>17</sup>を目的としていた。二大事業として1918年にハルピン商品陳列館を発足し、1920年には同じくハルピンに日露協会学校を開校させた。『日露協会報告』を不定期で発行。1925年の日ソ国交樹立以降は主に実業界との関係が活発になり、半官半民のような団体であった<sup>18</sup>。1926年1月「ロシア展覧会」(大阪) 開催、1927年5-7月「新露西亜美術展覧会」の後援、1928年10月の日本児童書展のための児童書等の蒐集・発送を行った。

- ▶8 この時の見聞を元に帰国後に Пильняк Б.А. (1927) *Корни Японского солнца*. М., Прибой. を刊行 (表紙に友衛というサインがあり、前衛画家矢部友衛の装丁と思われる)。1928年には日本語訳『日本印象記』(原始社)も刊行されている。ピリニャークと日本の関係については、Пильняк Б., Савелли Д. (2004) を参照。
- ▶9 ヴァイオリニストのジンバリストやエルデンコ、露西亜歌劇団など。
- ▶10 メイエルホリド劇場の演出部研修生で、およそ半年間日本に滞在し、帰国後1929年に日本滞在記として *Невиданная Япония* を刊行。その一章が伊藤聡 (2013) で訳出されている。
- ▶11 外交資料館資料、Ref. B04012281000。新露西亜美術展覧会契約書及び報告書。
- ▶12 二人は、当時の教育人民委員ルナチャルスキーにこの展覧会のソ連側委員を任命された。プーニンの作家活動、展覧会開催に関する経緯、展示物を運搬して日本へ向かうまでの道中や日本滞在時の印象などについては、Пунина. И.Н. (1992) pp.427-443に詳しい。
- ▶13 東京5月18日~30日「東京朝日新聞社」、大阪6月15日~28日「朝日會館」、名古屋7月3日~7日「愛知県商品陳列所」にて開催された。
- ▶14 開催の経緯について五十殿利治 (1998) pp.761-814で詳しい検証がされている。
- ▶15 「ロシアと日本の子供の絵の展覧会」『読売新聞』1928年10月30日 (朝刊3面)。
- ▶16 三つの団体については内田健介 (2017) pp.71-78を参照。日露協会については富田武 (2007) 及び (2010) pp.203-260を参照。
- ▶17 外交資料館資料、Ref. B03041010000。日露協会規約。
- ▶18 大正・昭和初期の政治家で日露協会との関係について、富田武 (2007) pp.310-321、及び富田武 (2010) pp.203-260を参照。

- ▶19 外交資料館資料、Ref. B03041028500. 日露芸術協会設立経緯、及び会報。

### 2-1-2 日露芸術協会

「ロシア芸術の研究並に日露芸術の交換を図り両国民の文化的親善提携」<sup>19</sup>を目的として、1925年3月設立された。発起人には劇作家秋田雨雀(1883-1962)、演出家小山内薫(1881-1928)、文学者の尾瀬敬止(1889-1952)、中村白葉(1890-1974)、米川正夫(1891-1965)、ジャーナリストの昇曙夢(1878-1958)、画家の村山知義(1901-1977)、山本鼎(1882-1946)、指揮者山田耕筰(1886-1965)ら民間人がなっている。会報『日露芸術』を発行。1925年3月には「新ロシア美術展覧会」を東京で主催、1926年3月ピリニャークの来日に際してはその受け入れ、1927年5-7月日本で開催されたヴォクスと朝日新聞社共催の「新露西亜美術展覧会」の後援をしている。また、1927年11月のソヴィエト革命十周年記念式典には小山内薫、尾瀬敬止、米川正夫、秋田雨雀がヴォクスから国賓待遇で招待され、すでに10月から滞在している秋田を除く三人が訪ソをし、翌1928年には歌舞伎ソ連公演の実現に向けての活動をしている。しかし1928年共産党員の斉検拳の際に捜査の対象となり、急速にその活動は失速していった。

### 2-1-3 日露扶養会

内藤民治(1885-1965 ジャーナリスト、総合雑誌『内外』創設者)によって設立されたが、この会について活動記録や会員などの資料はほとんど残されていない。1923年後藤新平は北京滞在のロシア共和国の極東全権大使であったA.ヨッフエ(A. Иоффе 1883-1927)を招いて、日露国交回復のために交渉をしていた<sup>20</sup>。「外事警察報」によると、その時内藤は「文明の大道を建設せよ、日露国民相扶会創設の提唱」と題する小冊子を作り関係者に配布した。それに端を発して日露扶養会が発足された<sup>21</sup>。同年末に訪ソし、L.トロツキー(Л. Троцкий 1879-1940)やA.レイコフ(A. Рыков 1881-1938)ら政府要人らと会談をした。その後は活発な活動を開始しソ連からも信頼を得ていたようだが、資金的な問題で、1927年にはその活動は消滅している<sup>22</sup>。

- ▶20 ワシーリー・モロジャコフ(2009) p.141を参照。
- ▶21 外交資料館資料、Ref. A04010401300. 外事警察報第31号pp.59-60。
- ▶22 富田武(2007) pp.313-315。及び内田健介(2017) pp.72-75を参照。

## 2-2 ソ連における文化交流事業

■表2 ヴォクスが窓口となってソ連で行われた日本紹介

年	展覧会等	日本からの参加者
1925年	8月 対外文化連絡協会(VOKS)設立	
	9月 ロシア科学アカデミー創立200年祭	
	レニングラード、モスクワ	福田徳三 八杉貞利 松村松年
1926年	4月5日 日本文学の夕べ モスクワ	黒田乙吉 片山潜他

1927年	1月 岡本綺堂原作・コンラード訳『織田信長』初演 レニングラード	
	11月7-8日 革命十周年記念式典	小山内薫 11/24-12/13
		秋田雨雀 10/13-'28.5
		米川正夫 11/7-'28.1/10
		尾瀬敬止 11/7-12/12
	12月12日 現代日本の演劇と文学の夕べ	秋田雨雀、尾瀬敬止、米川正夫が講演
	12/14-1930/11 中条百合子・湯浅芳子の訪ソ	
12月 後藤新平訪ソ		
1928年	1月3日 日本の夕べ モスクワ	後藤新平 田中都吉駐ソ大使
		田中清次郎 八杉貞利
		秋田 米川 中条 湯浅
	8-9月 歌舞伎公演 モスクワ、レニングラード	
	9月14-18日 トルストイ生誕百年記念祭	昇曙夢
	10月11-21日 日本児童書籍展覧会 モスクワ	
	ハリコフ 12月16日から1週間 キエフ 1929年2月27日-3月7日	
オデッサ 1929年7月27日-8月2日		
1929年	6月 日本映画展覧会 モスクワ	

表は本稿で引用した新聞、雑誌等のデータを基に筆者作成。

1925年7月25日朝日新聞社は自社の飛行機による「欧州訪問大飛行」を決定し、8月23日モスクワに降り立った<sup>23</sup>。このニュースは欧州の人々を極東の日本に目を向けさせるきっかけとなったであろう。

国交樹立以前からも経済、政治において当然往来はあったが、1925年8月全ソ対外文化連絡協会(ヴォクス)の設立によって少しずつ文化交流が広がってゆくことになる。このヴォクスの機関とは。ソ連邦と諸外国における対ソ友好団体との文化交流発展を促進することを目的とし、それは文化交流に限った国家機関で<sup>24</sup>、会長はO.カーメネヴァ(O. Каменева 1883-1941)<sup>25</sup>である。その活動は、海外及びソ連邦の相互情報促進、友好団体との関係促進、講座・講義・コンサート・夕べ等を通じて文化・技術・生活・言語の相互研究、ソ連邦を科学的文化的目的で訪問する外国人の援助、科学者の交換、露英独語版の定期行物(Weekly News Bulletin 週刊誌)の発行と配布、書籍の交換事業などが挙げられる<sup>26</sup>。詩人V.マヤコフスキー(V. Маяковский 1893-1930)、作曲家S.プロコフィエフ(S. Прокофьев 1891-1953)やD.ショスタコーヴィチ(D. Шостакович 1906-1975)、作家のM.ショーロホフ(M. Шолохов 1905-1984)、映画監督のS.エイゼンシュテイン(S. Эйзенштейн 1898-1948)らが、ヴォクスの活動に積極的に参加した。

日ソ交流において日本からは、1925年7-9月の「科学アカデミー創立200年祭」には福田徳三(1874-1930 経済学者)<sup>27</sup>、松村松年(1872-1960 昆虫学者)<sup>28</sup>、八杉貞利(1876-1966 ロシア語学者)<sup>29</sup>が出席し、1926年の「日本文学の夕べ」には大阪毎日新聞モスクワ特派員の黒田乙吉(1888-1971)と片山潜(1859-1933 労働運動家)が出席した。日ソ交流は表の如く、11月7-8日の「革命十周年記念式典」、12月12日の「現代日本の演劇と文学の夕べ」と1927年に入って一気に盛り上がりを見せる。そして、ハイライトは翌年の歌舞伎公演と日本児童書籍展覧会である。

児童書展の内容、開催経緯を以下で述べる。

- ▶23 朝日新聞は日露芸術協会の交流事業に度々経済的支援をしている。1926年ピリニャークの大阪—東京間移動に自社の飛行機を使った。
- ▶24 « Два года культурного сближения с границей». Сборник ВОКСа, под ред. О. Д. Каменевой. М., 1925、尾瀬敬止(1931) pp.217-224、及び『日露年鑑』(1929) pp.213-215を参照。
- ▶25 革命家トロツキーの妹で、カーメネフの最初の妻。ヴォクス会長職は1925-29年まで。
- ▶26 «УСТАВ Всесоюзного Общества Культурной Связи с границей». Правда, №184, 14 авг. 1925 г.
- ▶27 東京商科大学教授、帝国学士院会員。日本の経済学黎明期の代表的経済学者。
- ▶28 北海道帝国大学教授。日本の近代昆虫学の先駆者。
- ▶29 八杉貞利(1925) pp.37-57。ソ連政府の学術政策を賞賛する一方で、負の部分をも指摘している。

### 3 「日本児童書展」開催について

児童書展に関してはこれまで注目されることがなかった。この項では残された記録を集め、展覧会開催の経緯、展示物の内容、開催を巡る人的ネットワークを精査することによって全容を再構築し、いかに受け入れられたかを考察する。

#### 3-1 児童書展開催の経緯

1928年11月8日付、在ソ臨時代理大使酒匂秀一からの外務大臣田中義一宛報告書によれば、10月11日より11日間、モスクワの国立歴史博物館においてヴォクスと国立芸術科学アカデミーの主催で「日本児童図書、及成績品展覧会」<sup>30</sup>が開催されたとある。「我国ノ学童成績品、児童向各種図書、及児童生活ノ一斑ヲ紹介スルニ足ル資料」が展示されたこと、そのために「教科書、児童雑誌、新聞絵本ヲ始メ伝説、歴史、童謡、児童劇、育児、教育等ニ関スル図書約千五百点成績品ノ幼稚園及小学校児童ノ図書七百点他ニ書キ方及手工成績品アリ其ノ外多数ノ玩具、教授用具、掛図並ニ学校生活ニ関スル写真十数葉ヲ加ヘ我国ニ於ケル児童教育ニ周到ナル用意アルコト及児童ノ優秀ナル成績ヲ紹介スル」周到な準備がされたこと、さらに、ソ連の教育局は前年より学校巡回展覧会を催し自国の教育事情を国外に紹介する一方、国内において諸外国のこの種の展覧会を開催する努力をし、今回の我国の展覧会は内容も充実し、主催者や参観者を満足させたようだ、と同報告書には記載されている<sup>31</sup>。

開会式ではヴォクスの会長カーメネヴァ、それに続いて芸術科学アカデミー総裁P.コーガン(П. Коган 1872-1932)が祝辞をし、日本からは大使を始め館員らが出席し、田中都吉大使(1877-1961)が謝辞を述べた<sup>32</sup>。展覧会には芸術家、教育者、児童、印刷業者ら4000人以上が訪れ、21日閉幕した<sup>33</sup>。

児童書展開催に際して作成された冊子には「我々の展覧会の目的は、現代日本の芸術文化や印刷技術、階級的イデオロギーを児童書籍のうちに見出すことである」<sup>34</sup>と記されている。

展示品収集にあたってはヴォクス日本支部代表のE.スパルヴィン(E. Спальвин 1872-1933)<sup>35</sup>を中心に、日露協会や日本童話協会の後援のもと展示品が集められた。収集のために、東京書籍商組合と書籍出版協会が出品を募る印刷物を作り、その会員や書店、蒐集家に配布をした。早稲田大学出版部、丸善、富山房アルス、実業之日本、アイデア、博文館、目黒書店、丁未出版社、朝日新聞社出版部、三省堂等が協力し、それぞれの本には露文の説明書が添付された。それに藤澤衛彦(1885-1967)<sup>36</sup>の稀書が加わった<sup>37</sup>。ヴォクスの機関誌によれば、さらに金井信生堂は150冊の書籍、セノオ楽譜の楽譜等も挙げられている<sup>38</sup>。このようにして、全国から寄せられた寄贈物は児童書ば

- ▶ 30 原表現では“Выставка детской книги и детского творчества Японии” (日本語にすると「日本の児童書及び児童作品展」)
- ▶ 31 外交資料館資料、Ref. B04012283900。「日本児童図書成績展覧会ニ関シ報告ノ件」
- ▶ 32 «Выставка детской книги Японии». *Известия*, 12 окт. 1928.
- ▶ 33 “Exhibition of Japanese children's books in Moscow”. *Weekly News Bulletin*, No.50-51, 1928, pp.16-17.
- ▶ 34 Мексин Я.П. (1928) p.6.
- ▶ 35 1898年 Санкт-Петербург 大学東洋語学部卒。1899年4月-1900年8月日本滞在中、二葉亭四迷らと親交を結ぶ。1925年4月ソ連全権代表通訳に、8月ヴォクス日本代表に任命される。日本での著書『横目で見た日本』(新潮社、1931年)がある。彼の研究として藤本和貴夫(2010)を参照。
- ▶ 36 作家、民俗学者、研究者。1922年日本童話協会、26年童話作家協会設立に参加。絵入り童話本や風俗資料の蒐集家。
- ▶ 37 「モスクワへ出品する子供の浮世繪—藤澤衛彦氏の秘蔵品をきくふ露大使が下見」『読売新聞』1928年5月8日(朝刊7面)。駐日ソ連大使トロヤノフスキー、スパルヴィン、藤澤衛彦らが下見をする様子の写真が掲載されている。
- ▶ 38 前掲33、pp.16-17。

かりでなく、子どもの生活全般に亘る豊富で奥行き深いものとなった。

■図1 ヴォクスの定期刊行物に掲載された児童書展の様子<sup>39</sup>。



これらは日露協会の保管室に集められ、6月末までにモスクワへ向け発送されたようである。なお、児童展はこの後、ハリコフ（現ハルキウ）<sup>40</sup>、キエフ（現キーウ）<sup>41</sup>、オデッサ（現オデーサ）<sup>42</sup>を巡回した。

### 3-2 展示物の内容

児童書展冊子を執筆したY.メクシン（Я. Мексин 1886-1943）よれば、出品書籍は1450点に達し、その内容を大別すると次の如くである。

■図2 児童書展冊子の表紙<sup>43</sup>



■表3 児童書展展示物内訳

絵本と遊び絵本	420点
昔話、伝説、お話し	157点
歴史文学	52点
児童劇、児童遊戯	13点
児童科学	36点
新聞、雑誌	252点
楽譜	193点
教科書	278点
教育者及び保護者用書籍	49点

この中では絵本が一番多く、次いで教科書、新聞・雑誌、楽譜と20年代の日本の子どもたちの生活を知ることが出来るものが多く含まれている。

メクシンは「西欧の殆どの古典文学（グリムとアンデルセン童話、イソップとラ・フォンテーヌの寓話、児童向けダンテやシェークスピア、ワーグナー、ロビンソン・クルーソー、学生日記、「青い鳥」等）がある。L.トルストイの童話、ロシア民話、クリョロフ、ドミトリエフ、ヘムニツェル<sup>44</sup>の寓話の出

▶39 前掲33、p.17。

▶40 1928年12月16日から1週間、児童図書館にて。外交資料館資料、Ref. B04012283200。

▶41 1929年2月27日～3月7日、キエフ市国民図書館にて。外交資料館資料、Ref. B04012282400。

▶42 1929年7月17日～8月2日、トルストイ絵画陳列所にて。外交資料館資料、Ref. B04012283800。

▶43 Выставка детской книги и детского творчества Японии. М., ВОКС и ГАХУ, 1928.

▶44 クリョロフ (И. Крылов 1769-1844詩人・寓話作家)、ドミトリエフ (И. Дмитриев 1760-1837詩人)、ヘムニツェル (И. Хемницер 1745-1784詩人)

▶45 教育的に必要な視覚教材のこと。

▶46 前掲43、pp.10-14。

▶47 尾瀬敬止 (1928) p.58。

▶48 Мексин Я.П. (1932) pp.45-46. メクシンはこの試みは日本展で特に成功した、それは日本が豊富な展示物を揃え、理解を示してくれたからだとしている。

▶49 メクシンが企画したドイツと日本の児童書展について Виноградова О., Захаров К. (2019)を参照。

出版物があったことは嬉しい驚きである。…(中略)…書籍出品物の他に、版画(そのうち数枚は役者の似顔絵や芝居に関するもの)、200枚の様々な題材の教育的な掛軸<sup>45</sup>、工場製や手作りの玩具、児童の手による作品があり、それには600点余りの児童の描いた図画が含まれている」と冊子に記している<sup>46</sup>。

それらは三種類に大別し、第一部を図書、第二部を玩具、第三部を子どもの図画と定めて陳列された<sup>47</sup>。展示にはただ書架に並べられたものを見るといった従来の形ではなく、舞台効果をもたせ、まるで本格的な「日本を旅する」といった展示法がメクシンによって試みられた。来場者は実際に日本の子どもたちの世界を旅する観光客となり、その展示物を辿った。日本の街並みを通り、本屋に並ぶ最新の児童雑誌や軍人の版画、子どもたちの遊びを見て、寄席に寄って囁を聞くといった新しい形態の展示だった<sup>48</sup>。

### 3-3 児童展を巡る人々

展覧会開催に至るまでにどのような人々が係わり、いかにして開催に漕ぎ着けたのかを考察する。

メクシンは、一貫して児童書に関わる活動をした人物である。児童文学者として未就学児向け児童書を書いたばかりではなく、児童文学出版に関する理論的作品も執筆している。1924年には初の児童書展を開催し、それからは展覧会の企画やその展示法へと関心を向ける。それは彼が最も成功した仕事となった。彼は展覧会キュレーターとして、子どもの思考や感情にフィクションやおとぎ話の世界を提示するといった静かな見るだけの展示ではなく、子どもたちが展示物を手に取り、作り、くっつけるといった彼らの探求心を満たし、そうすることによって社会の諸現象を説明するといった手法を取り入れた。展示物と子どもに双方性を持たせた展示法だったのである。彼は国内外でのそういった展覧会開催に意欲をもっていた。それは今回の展覧会を予想させるものであった。

一方、主催者のヴォクスは、ソ連と諸外国の文化交流を積極的に推し進めるために、そのひとつとして国外でのソヴィエトの児童書展を多く開催するとともに、国内でも外国の児童書展開催を計画していた。それはメクシンと利害が一致していた。メクシンの協力により、1927年10月、ベルリンでソヴィエト児童書展が開催された。その成功に後押しされ、翌年3月8-27日モスクワの歴史博物館に於いて「ドイツ児童書展」が外国の児童書展として初めて開催された。10月に2度目の展覧会として日本の児童書展が開催されたのだ<sup>49</sup>。1928年にヴォクスは日本の文化的イベントを企画し、そのひとつがこの児童書展であった。

児童書展冊子でメクシンは次のように記している。

「この準備には約八ヶ月を要した。極東の展覧会には概して、比較的困難な事情が伴ふものであるから此準備期間は決して長いといふことは出来ない。多くの困難に打ち勝つて開催の運びになったのは、第一に日本に於ける対外文化連絡協会の代表者スバルウィン博士に負ふ所が多い。彼のエネルギーと知己の多いことと博学とに依つて、いまだ嘗て日本がヨーロッパに示したことの無いほどの各種の豊富な材料を我々が蒐集し展覧することが出来

たのである。… (中略) …エ・ゲ・スパルウィン氏は展覧会の開催に付て日露協会と日本童話協会に援助を求めた。在東京ソヴェート大使館に於て開かれた準備の会には、有名な日本の童話作家、例へば巖谷小波氏 (の『日本昔話』は露訳がある)<sup>50</sup>や、日本の児童書籍の蒐集家にして斯界の権威者たる藤澤衛彦氏等が出席した。(以下略)<sup>51</sup>

主催者ヴォクスとキュレーターのメクシンにとって、ヴォクス日本支部代表者であるスパルヴィンは、日本学者であり日本に知己が多く、ソ連と日本に於ける仲介者としては適任であり、彼との繋がりは児童展開催にとって大きな意味を持っていた。

日本側の協力団体のひとつは日露協会である。ヴォクスの機関誌 “Weekly News Bulletin” には「展覧会の大成功はなによりも日露協会の尽力に負うところが大きい。」<sup>52</sup>と記されている。日露協会会員には駐日ソ連大使のA.トロヤノフスキー (A. Трояновский 1882-1955、日露協会名誉会頭)<sup>53</sup>、スパルヴィン (通常会員) の名がある<sup>54</sup>。また、もうひとつの協力団体の日本童話協会 (1922年設立) は童話の学術的、本質的研究をすることを目的とした団体で、理事には先に挙げた藤澤衛彦がいる。彼はこの児童展のために自己の蔵書を数多く寄贈している。児童書展が終わり、日露協会は『日露協会報告』<sup>55</sup>で、日本童話協会は機関誌『童話研究』<sup>56</sup>でそれぞれに展覧会冊子の日本語訳を載せている。しかし、具体的な経過報告や関係者について、またモスクワでの評判についての記述を見出すことは出来ない。唯一、尾瀬敬止<sup>57</sup>が『日露文化叢談』で概要を述べている<sup>58</sup>。

1927年11月の革命十周年記念式典に訪ソをしていた小山内薫、秋田雨雀、米川正夫、尾瀬敬止らは日露芸術協会の発起人たちで、この旅行が契機で翌年8月に歌舞伎のソヴィエト公演が実現している。小山内は12月6日メイエルホルド劇場で日本について講演をした。その時のことを彼は「去年の十一月、建国十年際に招かれて、私はモスクワを訪ねた。その時、ラビス<sup>59</sup>演劇の局長と偶々交わした会話が、この計画の動機となったのである。」<sup>60</sup>と歌舞伎公演のきっかけについて書いている。小山内が歌舞伎のソヴィエト公演の窓口になっていることから、2度目の児童書展を目論んでいたヴォクスは彼に児童書展の協力を依頼したのではないかと推測することが出来る。日本人関係者として “Weekly News Bulletin” が「革命10周年記念行事のために訪れていた小山内薫は展覧会準備に積極的に参加してくれた。」と唯一名前を挙げていることから児童書展の企画が持ち上がった時点で小山内が大きく関与していたことがわかる。

同じくヴォクスに招待されていた秋田雨雀の日記によると、この滞在中にすでに児童展の話が進んでいたようである。

「2月2日スパルウィン教授へ「日本児童教育展」についてはがきを出した。… (中略) …

4月13日ノヴォミールスキー氏と日本の歌舞伎の話や展覧会の話をした。… (中略) …展覧会は一度東京のロシヤ大使館で開いて、今大使館で全部保管してあるそうだ。一九月にはじめたいといていた—この展覧会のためには日本童話協会は個人の貸出しまでやるといって喜んでいて—自分は歌舞伎は

▶50 彼の『日本昔話』は1910年頃に露訳出版されている。Нихон мукаси банаси. С-Петербург, А. Ф. Девриен, [1910].

▶51 ヤ・メクシン (1928) 日露協会、p.5.

▶52 前掲33、p.16.

▶53 ソ連の外交官。1927-33年駐日ソ連全権大使を務める。

▶54 『日露年鑑』 pp.209-211。

▶55 前掲51、pp.1-12。

▶56 ヤ・メクシン (1928) 日本童話協会

▶57 ソヴィエト文化研究家。

▶58 尾瀬敬止 (1931) pp.159-163。

▶59 芸術家労働組合のひとつの地方名。

▶60 大隅俊雄 (1929) p.16.

▶61 岡崎宏次編 (1965) pp.119-120.

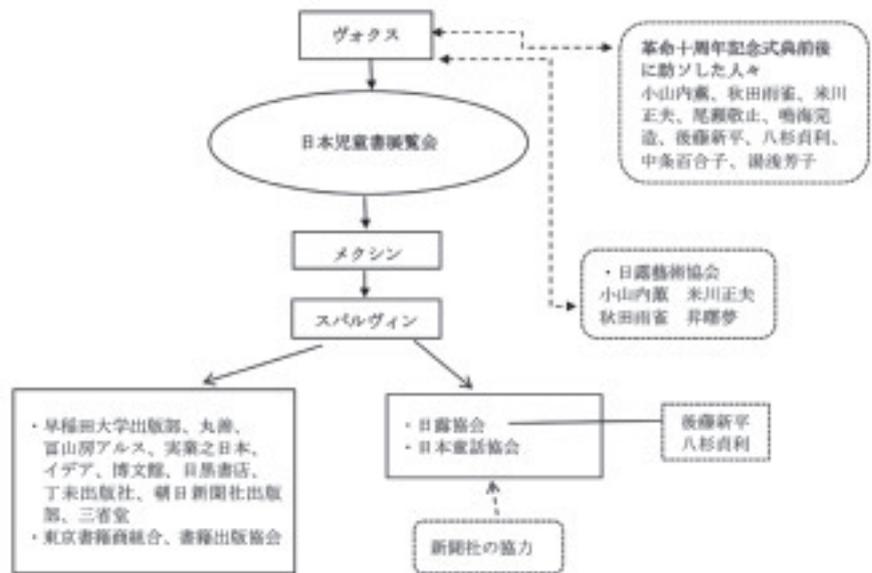
面白いものだが、恐らくはソヴェートに大した利益をもたらさないだろう、むしろ展覧会の方が意味があるだろうという (以下略)」と日記に記している<sup>61</sup>。

革命十周年記念式典に招かれた日本人たちは児童書展開催についての情報を共有していた見られる。

以上のことから、ヴォクスが児童展を企画し、キュレーターとしてメクシンに依頼し、仲介者としてスパルヴィンを選んだ。スパルヴィンは日本での知己の多さを活かし日露協会、童話協会に協力を求める。童話協会は東京書籍商組合や書籍出版協会、個人の蒐集家に声を掛ける。また、ヴォクスは1927年11月の革命十周年記念祭に招待した小山内薫が歌舞伎のソヴィエト公演の窓口になっていることから彼にも協力を依頼したのではないか。このように児童書展開催に向けて3人のキーパーソンの存在があったと推測する。

文化交流に関してこれまでは日露芸術協会が後援をしていたが、1929年には会報が休刊するなど失速状態であったので、日露協会が後援を引き受けたのであろう。児童書展について日露協会、その他関係者の間でどのような認識が共有されていたかは不明である。

■図3 児童書展を巡る関係図



### 3-4 日本の児童書はどのように受け入れられたか？

モスクワの人々は、児童書展を通して遠い極東の国、日本の文化をどのように見たのであろうか。ソ連の児童書に関わる人々にとって日本の児童書はいかに映ったのであろうか。1920年代の両国の児童書の動向を述べ、日本の児童書がいかに受け入れられたかについて考察をする。

#### 3-4-1 ソヴィエトの児童書とその背景

帝政ロシアが崩壊すると、それまでは左翼的とされてきた芸術家たちは革命を受け入れ、新しい社会を作るために意欲的な芸術運動を展開してゆく。

イデオロギー的目標が純粹芸術から生産と結びついた芸術へと変わり、彼らの創作活動の領域は商業デザイン、演劇、建築、写真、ポスター、舞台、衣装等々へ広がっていった。それが顕著に表れたのが児童文学、特に絵本であった。絵本は子どもの本でありながら、このような詩人や画家たちの芸術的自己表現の媒体という方向性をもつようになっていった。1921年にネップ（新経済政策）が始まり、経済が安定すると数多くの出版社が現れた。その特徴はその芸術的質の高さにあった。高い芸術文化を引き継ぎながらも、ロシア・アヴァンギャルドと結びつき、自由で実験的という特徴をもち、絵本を大衆文化へと導いた<sup>62</sup>。

しかし、1924年V.レーニン（В.И. Ленин 1870-1924）が死去し、J.スターリン（И.В. Сталин 1878-1953）とトロツキーの対立後、1927年の第15回党大会で第一次五カ年計画（1928年-1932年実施）が打ち出された。政治局員の追放、統制の強化などによってスターリンの独裁体制が確立すると、そのイデオロギーの規制は芸術活動を取り巻く環境にも及んだ。党の厳しい目は大人だけではなく、児童書にも向けられた。1928年2月1日レーニンの未亡人N.クループスカヤ（Н. Крупская 1869-1939）はソヴィエトを代表する児童作家K.チュコフスキー（К. Чуковский 1882-1969）の作品を「死罪」に値すると新聞紙上で弾劾し、その結果チュコフスキーの児童書をことごとく発行禁止にした<sup>63</sup>。また翌1929年12月9日付「文学新聞」（Литературная газета）では、S.マルシャーク（С. Маршак 1887-1965）<sup>64</sup>やD.ハルムス（Д. Хармс 1905-1942）<sup>65</sup>を一連の論文で厳しく非難している<sup>66</sup>。このような時代の中で日本の児童書展が開催されたのである。

### 3-4-2 1920年代日本の児童書とその背景

ソ連に送られた児童書はどのようなものだったのであろうか。1920年代の日本の児童文化を考えることによって、その傾向を知ることが出来る。

大正デモクラシーを背景にして、巖谷小波らによる明治的教育観が反映されたお伽噺ではなく、子どもの個性や自我を尊重しようと大正自由教育運動のもとに、近代的な児童観をもった新たな児童文学が出現した。こうして生まれたのが鈴木三重吉（1882-1936）が主宰する児童雑誌『赤い鳥』（1918-1936）である。創刊本の巻頭に三重吉は「世俗的な下卑た子供之読物を排除して、子供の純正を保全開発するために現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、子供のための若き創作家の出現を迎える、一大区画的運動の先駆」<sup>67</sup>と抱負を述べている。この運動には、一流の作家や詩人たちがこぞって参加している。創刊号には芥川竜之介（1892-1927）、島崎藤村（1872-1943）、徳田秋声（1872-1943）、童謡には北原白秋（1885-1942）、泉鏡花（1873-1939）らが名を連ねている。『赤い鳥』は児童ルネッサンスと呼ばれるような影響を社会や文化にもたらし、後続の児童雑誌として『金の船』（1919-1929）、『おとぎの世界』（1919-1922）、『童話』（1920-1926）、『コドモノクニ』（1922-1944）など芸術的な児童文芸雑誌を数多く輩出し、児童雑誌の黄金時代を築いた<sup>68</sup>。それらの児童雑誌はモダンでグラフィックデザイン感覚の、都会的で明るく楽しい印象のものであり、西洋的ライフスタイルをモチーフにしているところ

▶62 木下裕子（2009）pp.64-66。

▶63 Крупская Н. К. (1928) «О Крокодиле Чуковского». *Правда*, 1. фев. 及び *Книга детям*, №2, фев. С.13-16. クループスカヤはその声明の中で、「ブルジョアジーの残滓」であり「子どもたちに読ませてはならない」と酷評している。

▶64 ロシア児童文学の黄金期を牽引した作家であり、詩人、翻訳家。多くの児童書を発表する一方、*Двенадцать месяцев*（森はいきている）などの戯曲を手掛け、シェイクスピア、キプリングの翻訳をしている。

▶65 未来派の詩人。政府の文学統制により活動が自粛されたが、1920年代後半からは児童文学も手掛け成功を収めていた。しかし、1931年反ソの児童作家として逮捕、1941年2度目の逮捕の後に収容所で病死。彼の詩人としての作品は地下出版という形で受け継がれた。

▶66 1929年12月9日付け *Литературная газета* では、ハルムスやマルシャークを厳しく非難をしている。Блинов В.Ю. (2005) p.114を参照。

▶67 『赤い鳥』1918年7月号、p.1。

▶68 『赤い鳥』及びその児童文学運動について、菅忠道（1956）pp.97-156。河原和枝（1998）を参照。

ろが特徴的である。『赤い鳥』の運動は子どもの自主性を尊重し、何にも囚われない自由な発想を尊重した。その活動は山本鼎（1882-1946）による自由画運動へと発展した。山本は1912年渡欧し、その帰途の際（1916年）にモスクワで見た児童自由画展に強い衝撃を受け、子どもの自由画教育運動を推進した画家である。彼による自由画運動は子どもを手本の模写から解き放し、彼らの想像力を解放させ、その作品に芸術性を見出した。各地で児童による自由画展が開催され新しい芸術運動が生まれた。モスクワに送られた児童の図画は少なからずこの運動の影響をうけていたのではないかと推測される。

日本の近代的児童文学の開花を決定づけたのは1918年創刊『赤い鳥』である。しかし、関東大震災（1923）、その後の昭和金融恐慌（1927年）を転機に、『少年倶楽部』（1914-1962）をはじめとする大衆的・通俗的児童雑誌の飛躍的な進展と定着、芸術的児童雑誌との交替が起こった。それは1920年代児童文学の大きな特色である。

### 3-4-3 日本の児童書展はいかに受け入れられたか

児童書展開催に際し刊行された展覧会冊子以外では、美術史家のA.バクシンスキー（А. Бакушинский 1883-1939）が、美術雑誌『イスクーストヴァ』（Искусство）で、この児童書展について論評を書いている。

彼は、この児童書展は日ソ間の文化や芸術性の違いが際立ったことにおいて有意義であったと評価している。日本の児童書について、幼年期の児童には成長過程に応じて細やかな注意が払われ、民話やお話が提供されている。また、年長の児童には幅広い歴史読み物や、日本のみならず世界文学の名作が翻訳され供されている。児童書の装丁における出版技術に関しては、日本の「掛物」、「巻物」、木版画の洗練された伝統に則っているものは極めて上等である。その背景には、蓄積された日本芸術の伝統が息づき高い完成度が見られ、児童書は非難の余地がないと賞賛する。一方で、現代技術で作られたものは非常に粗悪で、特に安物の絵本においては顕著である。このような現象は新しい物質文化の影響によって起きている。また、出版物は、現代ヨーロッパの芸術潮流の影響にさらされている。ヨーロッパにおける屈折した日本の影響がブーメランの如く日本の児童書に反映されていると危惧している。バクシンスキーは以上の現象について児童書展の光と影と評している。

彼は日本の子どもの図画について、幼児期のものは民族を問わずその描き様は共通であるが、年齢が上がるにつれて教育者による一定の指導が入っているのが見られ、ヨーロッパの現代美術の技法を真似ようという試みが強くなっていると指摘する。それによって子どもたちは個性を失うだけでなく、民俗的な特性も奪われている。それは展覧会の観客に大きな落胆をもたらさだろうと記している<sup>69</sup>。

児童の描いた絵については、児童美術教育の専門家で、児童展冊子のもう一人の執筆者N.サクリナ（Н. Сакулина 1898-1975）もバクシンスキーと同様な評価を記している。幼児と低学年児の描いた自由画は、如何なる民族も大差はない。しかし、教師の指導の下に描かれた高学年の児童の写生画は、フランスの印象派の影響を受けているのに驚かされること。日本古来の版画や

▶69 Бакушинский А.В. (1928).

蒔絵を期待して児童展に来た者は、ヨーロッパ文化と美術の氾濫している日本を見出して驚き失望するだろうと指摘している<sup>70</sup>。ソ連に送られた日本の子どもたちの絵は自由画教育運動の影響を受けていたと推測され、バクシンスキーとサクリナが期待する伝統的日本様式のものとは乖離していたのである。

メクシンとバクシンスキーは一樣にソヴィエトの殆どの古典書が翻訳されていることに驚き、日本の教科書類については実用書にもかかわらず芸術作品と呼べるものであると評価している。一方、児童雑誌が年齢（『一年生』、『二年生』等）、性別（少年向け、少女向け）によって区別されているのは論議されるべきであると指摘している。教科書については10月12日付イズベスチャ（Известия）紙も「我国の児童書は芸術的なものと実用書に分けられるが、日本にはこのような区別がない。日本のものはどれも芸術作品である」と報道している。

メクシンとバクシンスキーは日本の児童書に民族的伝統を求めている。彼らは児童書展の支援者でもある藤澤衛彦の稀書や、1910年代に既にロシアでオリジナルの挿絵付きで翻訳出版されていた巖谷小波の昔話やお伽噺を介して得たイメージを通して、日本の20年代児童書を見たのであろう。メクシンは、この児童書展終了後の翌年、展示物であったと想像される日本昔話を3編『Страна дураков（阿呆の国）』<sup>71</sup>、『Длинное имя（長い名）』<sup>72</sup>、『Три телки（三匹の雌牛）』<sup>73</sup>を刊行している<sup>74</sup>。それらのもととなる原作は不明であるが民話であり、3冊に付けられた挿絵は明らかに東洋趣味のものである。それらが彼の求める日本の児童文学であると思われる。

しかし、実際の1920年代の日本の児童文学は、それまでの江戸文化の系譜を継いだ明治期のお伽噺の歴史とははっきりと一線を劃するものであった。アメリカやヨーロッパからの新しい教育思潮の影響の下に、子どもを純粹無垢な存在と見なす『赤い鳥』を中心とした新しい児童観が確立したのである。メクシンとバクシンスキーが日本の児童文学に期待するイメージは既に日本においては否定されていた。新しく生まれた絵本や児童雑誌の表紙や挿絵を描いたのが、大正デモクラシーの自由な雰囲気の中で、文章の添え物から独立した「童画」の世界を作り上げた画家たちであった。1920年代には、未来派、ダダ、構成主義など海外の前衛芸術が日本にも及び、D.ブルリューク（Д. Бурлюк 1882-1967）やV.ブブノワ（В. Бубнова 1886-1983）らの来日によってロシア・アヴァンギャルドの展開など、新しい芸術を模索する機運が一気に高まっていった。そのような風潮は子どもの書籍にも及び、彼らはそこに新しい風を吹き込んだ。20年代前衛美術運動でエネルギッシュに活動していた画家たちは児童書籍の紙面でも溢れんばかりの表現の筆をふるった。ゆえに、児童書展の観客たちが抱く極東日本の児童書に対する民族的伝統という固定観念と実際の1920年代日本の児童書との間には大きな隔たりがあったのである。

▶70 Сакулина Н.П. (1928).

▶71 絵：シュテレンベルグ Штеренберг Д. П. ГИЗ, 1929.

▶72 絵：モギレフスキー Могилевский А. П. ГИЗ, 1929.

▶73 絵：ベフチェエフ Бехтеев В. Г. ГИЗ, 1929.

▶74 元になっている日本の作品名は不明。

## 4 児童展開催に至る背景

日ソ関係は1900年代から20年代にかけて緊張と緩和が繰り返された。その緩和状況のピークが1927年から28年であった。日本のそれまでの膠着状態から政治・経済・文化の交流を積極的に推進しようという機運が生まれた。それは次のような軌跡を辿って生じた。

日露戦争（1904-1905）後、1907年から1916年までに4度にわたり日露協約が締結されたが、1917年11月のロシア革命によるソヴィエト政権の成立、日本のシベリア出兵（1918-1920）によって日ソは敵対する関係になった。その後も、日本は対ソ不承認政策を堅持し、日ソ関係は膠着状態にあった。長い準備・交渉段階を経て1925年1月20日日ソ基本条約が北京で調印されたが、実際は同年4月の治安維持法公布で日本はソ連との関係に及び腰だった。しかし、1927年田中義一内閣<sup>75</sup>が成立すると状況が変わった。彼は国内では社会主義運動に激しい弾圧<sup>76</sup>をする一方、中国への積極的な介入のためにソ連との関係改善を図った。ソ連も中華民国や英国との国交断絶、ドイツとの疎隔などによる国際的孤立から脱却することが必要だったことなど、日ソそれぞれの事情をふまえて急接近を試みた時期となった。

田中は首相就任後、鉱業界の実力者久原房之助（1869-1965）に特派海外調査員として欧州経済視察（ベルリン、モスクワ）を命じ、久原は1927年11月特使としてスターリン（共産党書記長）と会見をする。続いて行き詰まっている漁業協約改定交渉の打開のために白羽の矢を立てたのが、革命以前から積極的にロシア及びソ連との関係作りに関わってきた後藤新平<sup>77</sup>であった。彼は、田中清次郎（1872-1954 日露協会理事）、関根斉一（生没年不詳 日露協会主事）、八杉貞利（1876-1966 ロシア語学者）らと1927年12月22日モスクワに入り、翌年1月21日出立までの間に非公式訪問だったにもかかわらずスターリン、G.チチャーリン（Г. Чичерин 1872-1936 外務人民委員）、L.カラハーン（Л. Карахан 1889-1937 外務人民委員代理）、A.ルイコフ（А. Рыков 1881-1938 人民委員会議長）、M.カリーニン（М. Калинин 1875-1946 ソ連邦中央執行委員会議長）などソヴィエトの指導者たちと会見した。スターリンが久原に続き後藤と相次いで会見することは異例であり。特筆に値することであった。

文化交流に関しては、ヴォクス主催で「ソヴィエト連邦国情紹介展覧会」（1926年8月）、「新露西亜美術展覧会」（1927年5-7月）、「新ロシア児童作品展覧会」・「日露児童絵画展覧会」（1927年7-10月）が日本で開催された。一方ソ連においては、後藤新平のモスクワ訪問と前後して、1927年11月の革命十周年記念式典を頂点として様々な催しが行われ、日本からは多数の芸術家たちが訪ソをしている。このように今までにない日ソ両国間の友好ムードの高まりがあった。それが翌年の歌舞伎のソ連公演と「日本児童書籍展覧会」開催の実現を可能にした要因である。児童書展の展示物蒐集に関して、日

▶75 1927年4月～1929年7月。田中は外相を兼任。

▶76 三・一五事件（1928.3.15）、四・一六（1929.4.16）の2度の共産党検挙と治安維持法の改正（最高刑を死刑にまで引き上げた）。

▶77 台湾民政長官（1898-1906）、南満州鉄道総裁（1906-08）、通信大臣（1908-11、1912-13）、内務大臣（1916-18）、東京市長（1920-23）、日露協会会頭（1919-1929）、拓殖大学学長（1919-29）等を歴任。

本の多くの企業や個人のネットワークの存在が必要ではあったが、このような友好ムードが開催に向けての後押しをしたと考える。

しかし、翌1929年後藤の死去（4月）と田中内閣の総辞職（7月）、スターリンとの政治抗争による元夫カーメネフと兄のトロツキーの失脚でカーメネヴァはヴォクスを解任される（7月）など、友好ムードの中核となった人達が相次いで表舞台から去ったことで文化交流の進展も減速してしまう。児童書展はまさにその直前の時期に実現したのである。

歌舞伎公演は莫大な費用の面から実現が難航し、成功裏に終わらせるためには大規模なキャンペーンが必要となり、文化交流の枠を超え政治的な意味をもつことになった。それはさらなる友好ムードを政治的に作ることになった。しかしそれは関係者が帰国後に、極右派の人々の妨害活動に会うことにもなった。それに比べ、日本からの寄贈による児童書展はソ連にとって費用もかからず、政治性も低く、広く一般市民に受け入れられやすかったと考えられる。ゆえに歌舞伎公演の影で忘れ去られた存在になってしまった。

## 5 おわりに

本稿は一見目立たない1920年代の児童書を媒体とする日ソ交流史の分析を試みた。歌舞伎公演と児童書展は対照的な研究がされてきた。しかし、児童書展の全容を解明することによって、日ソ両国間の政治的接近が文化交流を推進し、その高まりの中で児童書展開催が実現したこと、それを後押ししたのが共通の認識は見られなかったにもかかわらず多方面にわたる人的ネットワークの存在であったことが明らかになった。児童書であるために、日本においては間接的に新しい体制の国を宣伝する媒体となっていたが、歌舞伎公演のような赤化を危惧する世論をかわし友好ムードでの交流となった。またソ連国内においては、広く一般市民の目に直接触れることによって、ヨーロッパの人々の日本趣味に迎合した日本のイメージに対して、児童書から玩具や児童の作品までという広範囲にわたる20年代日本の新しい児童文化を市民が実際目で見定め、人々が共有していたイメージと実際のそれとの違いを自身で見定める媒体となったことは大きな成果であったと考える。

### 参考文献

- 伊藤聡（2013）「1927年、メイエルホリド劇場から来日したロシア人—グリゴリー・ガウズネル（1907-1934）」  
([https://chemodan.jp/chemodan\\_no07\\_pc/index.html?article=66](https://chemodan.jp/chemodan_no07_pc/index.html?article=66). 2022年3月15日閲覧)
- 内田健介（2017）「日ソ国交回復前後の文化交流とその政治背景」『歌舞伎と革命ロシア——一九二八年左団次一座訪ソ公演と日露演劇交流』森話社、pp.65-90.
- 太田丈太郎（2014）『「ロシア・モダニズム」を生きる 日本とロシア、コトバとヒトのネットワーク』成文社

- 五十殿利治 (1998) 『大正期新興美術運動の研究』 スカイドア
- 尾瀬敬止 (1931) 『日露文化叢談』 大阪屋號書店  
(1928) 「モスクワに於ける日本児童展」 『童話研究』 第8巻2号、日本童話協会、p.56-58.
- 岡崎宏次編 (1965) 『秋田雨雀日記II』 未来社
- 大隅俊雄 (1929) 『市川左団次 歌舞伎紀行』 平凡社
- 河原和枝 (1998) 『子ども観の近代 『赤い鳥』 と「童心」の理想』 中公新書
- 菅忠道 (1956) 『日本の児童文学1総論』 大月書店
- 木下裕子 (2009) 「アサヒ・コドモの會『コドモの本』」 『ロシア語ロシア文学研究』 第41号、日本ロシア文学会、pp.63-72.
- スパルウキン (1931) 『横目で見た日本』 新潮社
- 富田武 (2007) 「後藤新平と日露協会 1920-29年」 『環』 vol.30、藤原書店、pp.310-327.  
(2010) 『戦間期の日ソ関係』 岩波書店
- 鳥越信 (2001) 『はじめて学ぶ日本の絵本史 I』 ミネルヴァ書房
- 成田龍一 (2007) 『大正デモクラシー シリーズ日本近現代史④』 岩波新書
- 沼辺信一 (2005) 「旅する絵本たち 一九二八・二九年 東京・モスクワ・オデッサをつなぐ人々」 『窓』 ナウカ、133号、pp.34-42.
- 藤本和貴夫 (2010) 「E.Γ.スパルヴィン—激動の日露・日ソ関係を生きたロシア最初の日本研究者」 中村喜和、長縄光男、ポダルコ・ピョートル編 『異教に生きるV』 成文社、pp.191-212.
- ボリス・ピリニャーク (1928) 『日本印象記—日本の太陽の根帯—』、原始社
- 八杉貞利 (1925) 「日露の現状」 『講演会速記録』 日露協会編
- ヤ・メクシン (1928) 「モスクワにて開催された日本児童書籍展覧会について」 『日露協会報告』 第39号、日露協会、p.1-12.  
(1928) 「モスクワにて開催された日本児童書籍展覧会について」 『童話研究』 第8巻1号、日本童話協会、pp.6-13、
- ワシーリー・モロジャコフ (2009) 『後藤新平と日露関係史』 藤原書店  
『日露年鑑』 日露通信社、1929年。  
「モスクワに開催された日本児童書籍展覧会について其他」 『日露協会報告』 第39号、日露協会、1928年。
- Бакушинский А.В. (1928) «Выставка детской книги и детского творчества Японии». *Искусство*, Кн.3-4, изд. ГАХН, С.155-160.
- Белов С. В. (1978) «Л. М. Клячко и издательство «Радуга»: у истоков советской детской книги». *Вопросы истории советской книги и библиографии*. Л., С.21-35.
- Блинов В. Ю. (2005) *Русская детская книжка-картинка 1900-1941*. М., Искусство XXI век.
- Виноградова О., Захаров К. (2019) «Картинки-путешественницы: Яков Мексин и выставки немецкой и японской книги в СССР», *Детские чтения*, том 16, №2, Пушкинский дом, С.180-205.
- Дэвид-Фокс М. (2015) *Витрины великого эксперимента. Культурная дипломатия Советского Союза и его западные гости 1921-1941*. Новое литературное обозрение.
- Мексин Я.П. (1932) «Из опыта музей-выставочной работы с детьми». *Советский Музей*, №.2, М., С.38-57.  
(1928) «Цель, состав и значение выставки». *Выставка детской книги и детского творчества Японии*. М., ВОКС и ГАХУ, С.3-15.
- Пильняк Б. (2010) *Письма.Т.2: 1923-1937*. Составление, подготовка текста, предисловие и примечания К. Б. Андроникашвили-Пильняк и Д. Кассек. ИМЛИ РАН.
- Пильняк Б., Савелли Д. (2004) *Борис Пильняк. Корни японского солнца. Дани Савелли. Борис Пильняк в Японии: 1926*. М., Три квадрата.
- Пунина. И.Н. (1992) «Из архива Николая Николаевича Пунина». *Лица. Биографический альманах*. Том 1, М.и С.П., Феникс,
- Сакулина Н.П. (1928) «Рисунки японских детей», *Выставка детской книги и детского*

*творчества Японии*, М., ВОКС и ГАХУ, С.16-19.

Два года культурного сближения с границей. *Сборник ВОКСа*. под ред.

О. Д. Каменевой, М., 1925. 外交史料館資料、Ref. B03041006500に添付。

“Exhibition of Japanese children's books in Moscow” . *Weekly News Bulletin*, No.50-51, 1928.

«Страна дураков», Рис. Д.П.Штеренберга, ГИЗ, 1929. 図録

<https://arch.rgdb.ru/xmlui/handle/123456789/30952#page/0/mode/2up> (2022年3月20日閲覧)

«Длинное имя», Рис. А.П.Могилевского, ГИЗ, 1929. 図録

<https://arch.rgdb.ru/xmlui/handle/123456789/27300#page/0/mode/2up> (2022年3月20日閲覧)

[付記] 引用に際して、旧漢字は原則として新漢字に直した。

(令和4年5月2日受理、令和4年9月20日採択)